

氏名(本籍地) 小森 亜紀子(東京都)
学位の種類 博士(学術)
学位記番号 博甲第59号
学位授与年月日 平成23年3月16日
学位授与の要件 昭和女子大学学位規則第5条第1項該当
論文題目 スペシャルオリンピックスがソーシャル・インクルージョンに果たす役割
—学校連携プログラムにおける交流経験を中心に—

論文審査委員 (主査) 昭和女子大学特任教授 秋山 智久
(副査) 昭和女子大学教授 坂東 眞理子
昭和女子大学教授 永山 誠
昭和女子大学教授 三浦 香苗
東洋大学大学院教授 小澤 温

論文審査結果の要旨

我が国の障害児教育は、知的障害児に対して1979年の養護学校義務化(五四義務化という)まで分離教育制度を採用してきたために、学校での知的障害児との接触・会話経験は少なく、その結果、一般市民の中の知的障害児・者にたいする偏見は依然強い。このような偏見を改善するために、さらに世界的な傾向であるソーシャル・インクルージョンを推進するためには、何らかの施策・プログラムが必要であるが、申請者はアメリカ合衆国(以下、アメリカと記す)で始まったスペシャルオリンピックス(以下、SOと記す)が、市民の中の偏見を修正し、市民への理解を促進するうえで有効な手段ではないかということに着目した。

そこで申請者は、SOの中でも特に「SO学校連携プログラム」という児童生徒を対象とした、知的障害児とSOを知るプログラムが、児童生徒の知的障害児に対する意識に与える影響を注視し、偏見を軽減し、理解を促進する可能性を秘めた両者の「交流体験」の効果を実証しようとしたのであった。

SOの他の障害者スポーツと比較した相対的独自性は、日々の生活の一部となっている「日常性」、学生や企業人を含む幅広いボランティアとの広い接点での「交流性」など9点があるが、「競争しない」ことによって、障害者一人ひとりの楽しみと自己実現の機会を与えようとするものである。

そして S0 の特徴は、ボランティアがその運営を担うことによって一般市民の知的障害のある人々への理解を深め、ソーシャル・インクルージョンを発展させる機能を持っている。

S0 学校連携プログラムは、実際にスポーツを一緒にしてみる授業等によって、児童生徒は、知的障害について学び、交流することにより、知的障害児・者への理解を深めることが可能になる。

本論文は、こうした S0 がソーシャル・インクルージョンに果たす可能性を探究するために、数地域の小中学校において、実証的な調査を行い、障害児と健常な児童生徒が交流経験を持つこと、特にその中でも、接触経験と会話経験が障害理解に有効であることを実証したものであった。このことは、一般常識や障害者福祉の現場では予想されていたことではあるが、日米の膨大な先行研究を調べてもそのエビデンスは殆どなく、それを数量的に証明したことには意義があるといえる。

つまり知的障害児・者と会話経験のあるものの方が、知的障害児の能力を高く評価し、知的障害児との交流にも積極的であるが、会話経験が実際にある児童生徒の人数そのものは少ないという特徴が見出されたのであった。同プログラムの実施により、児童生徒の知的障害児との会話経験が 11.3 ポイント増加したのである。そして会話経験がある児童生徒の方が知的障害児の能力を有意に高く評価したのであった。このことは、一般社会におけるソーシャル・インクルージョンを増進するために、障害児・者と市民との「会話」を創出する行事や機会が必要であることを予測させるものである。

申請者が、S0 がもたらす個別的な効果として、1) 家族の孤立からの脱出と前向きな意識への変化、2) 児童生徒が知的障害児へ能力を高く評価するようになった効果、そのことにより 3) 知的障害児理解が促進した効果、4) 市民が S0 との連携によって生まれる知的障害児・者に対する新しい見方、地域社会での差別解消などの効果を指摘していることは、今後のソーシャル・インクルージョンの発展に、どのようなプログラムが必要かを教えてくれるものであり、両者の交流の機会の創出・促進が、知的障害者理解とソーシャル・インクルージョンの実現に不可欠であることを示唆している。

本論文は、障害児・者に対する偏見の実態と歴史を概観し、また SO の実態を詳細に把握した上で、その理解を促進する交流の機会としての SO の有効性に着目し、申請者自らがその運動に深くかかわり、また、理論的にも日米の多くの先行研究に当たった結果、「交流」の効果が定量的に解明されていないことを知り、「学校連携プログラム」を用いて、その実証に努めたのであった。

しかし本論文は、実証に焦点を当てることに集中したあまりに、調査報告に捕らわれたように見える弱点を持ち、また、障害者理解とは何かという追究、「会話」の回数以上のその内容などの実質の解明、ソーシャル・インクルージョンの先にある「共生」の意味の探究など、理論的な検討が必要とされる課題を含んでいる。

とはいえ、審査員一同は、本論文が多大な先行研究を踏まえ、的確な実証の姿勢を持ち、向かうべき課題への解決の具体的方策を示唆したことへの学問的な貢献は多大であり、博

士論文として十分な内容を持つものであると評価とした。